

東福寺二七三世願海守航と 興昌寺藏朝鮮通信使関係詩箋貼交屏風について

片山 真理子

【目次】

はじめに

1. 東福寺二七三世願海守航とは

2. 興昌寺藏朝鮮通信使関係詩箋貼交屏風について

(1) 翻刻

(2) 解題

3. 朝鮮槐園が描いた山水図について

4. 対馬以酊庵での願海守航

まとめ

はじめに

香川県観音寺市興昌寺（臨済宗東福寺派）には一対の金屏風が伝わっており、そこには大小さまざまな漢詩文が寄せられた詩箋や贈答目録、絵画等併せて五十七枚が貼り交ぜられ、その筆跡の大半は江戸時代最後の朝鮮通信使によるものである。それらは一輩上人や樵隱禪師に宛てて詠まれた詩箋が数多く、一輩上人とはすなわち東福寺二七三世願海守航であることが知られる。願海守航は対馬以酊庵へ碩学僧として選ばれ、幾度か輪番で滞在している。東福寺からの出向で対馬へ滞在していたことは確かに文書で確かめられる願海守航ではあるが、文化度の朝鮮通信使

が対馬へ来た一八一一年には東福寺月耕玄宣が輪番で対馬へ赴いており、東福寺僧の職位や対馬以酊庵輪番の時期などを記した『東福寺誌』には願海守航がその時に以酊庵へ滞在したかの記載はなく、そこには彼が初めて対馬以酊庵へ輪番したのは二年後の文化十年（一八一三）からである。このように願海守航の対馬以酊庵における滞在時期は不明な点が多いと感じられたことが、本稿を記す大きなきっかけとなった。これまで本屏風（以下興昌寺朝鮮屏風）については観音寺市の郷土史家を中心とし、檀家衆らによって編まれた『興昌寺誌』（二〇一四年三月）に願海守航についての紹介があり、ここでは金屏風の全図を掲載し、七枚の詩文が翻刻された経緯がある。お寺の関係者をはじめ、観音寺市の郷土史家には知られた存在であった。本稿では実見調査を経て、願海守航の足取りについて知り得たいいくつかの新知見があったのでここに資料紹介と並行して論じることとする。

加えて、その他の類似作例として存在する相国寺慈照院藏朝鮮通信使関係詩箋貼交屏風（以下慈照院朝鮮屏風）との比較検討も行い、双方に存在する「朝鮮槐園」の落款が付された山水図の様子と筆者である卞持漢（槐園）についての研究史を鑑みつつ、私見を述べてみることにしたい。槐園は釜山で活動し、武任職にありながら、作画した人物である。興昌寺朝鮮屏風にはこの槐園が描いた山水図二枚ともに判事として対馬へ来島した清翁・秦東益が賛を寄せており、周辺の作例との比較検討を試み

たい。

1. 東福寺二七三世願海守航とは

さて、ここで主題にする東福寺二七三世に上った願海守航とはどのような人物であったのか。『興昌寺誌』によると願海は法号で守航は諱といひ、号は一葦、樵隱という^①。観音寺市旧坂本郷の大庄屋「米谷家」の出身であり、はじめは四国から岡山総社へ渡り、臨済宗東福寺派寶福寺へ入門。寶福寺は備中に有力な禪宗寺院であり、四国から岡山総社は海を隔てているものの、ほぼ対岸にあたる。なお画聖雪舟がここで小僧をしていたおりに涙で鼠の絵を描いたという逸話がある。備中神應寺も地縁であろうか。以下『東福寺誌』によれば、

文化八年（一八二一）十二月十一日、備中神應寺公帖をうく。

文化九年（一八二二）正月十二日、真如寺公帖をうく。

文化十年（一八二三）二月二日、以酹庵（対馬）に赴任、日韓書契を司る。（帰洛年月不詳）

文政八年（一八二六）三月十四日、東福寺へ入寺。十二月十二日、南禅寺住の公帖をうく。

文政十年（一八二七）二月十四日、以酹庵に赴任、日韓書契を司る。

（文政二二年六月八日帰洛）

天保十年（一八三九）四月、以酹庵に赴任、日韓書契を司る。

天保十二年（一八四一）四月十六日、東福寺に再住。

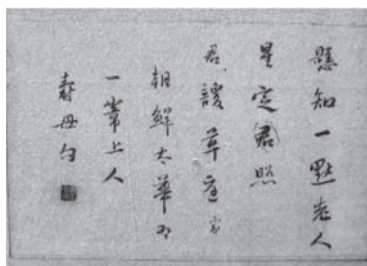
天保十四年（一八四三）八月二十八日（十四、二十四とも）に七十三歳で寂。^②

白石虎月『東福寺誌』より

のち臨済禅のつながりから相国寺山外塔頭真如寺、南禅寺などで公帖を受け、その後以酹庵輪番を務めたあとに東福寺二七三世となったのであろう。興昌寺には天保十四年八月に法華会法要のために、本山から下向中、二十八日に病にて示寂^③。興昌寺朝鮮屏風の来歴については興昌寺の「日課祠堂過去帳」二十二日の項によれば「清室貞鑑大姉 金五両並ビニ金屏風一双寄付」という^④。清室貞鑑大姉とは明和七年（二七七〇）に亡くなった郷里の母を指し、寺内にも墓地がある。この菩提寺での法華会の際に願海が持参したものと思われる。なぜなら願海の母を主題に寄せた詩箋（No.37・38）が屏風のなかに含まれているのである。

（No.37）李顕相筆

（No.38）李文哲筆



なお、興昌寺のほかには東福寺の自坊大機院にも願海守航の墓石が現存する。墓石には江戸時代後期の大機院三住職「月耕大和尚」「願海大和尚」「三嶽和尚」が一つの墓石に合葬されており、この中で月耕大和尚は月耕玄宣（？）一八二二年対馬以酹庵寂を指すものと思しい。

東福寺大機院所在 願海守航墓



(表)「月耕大和尚／願海大和尚／三嶽和尚」(側)「月 文化九年壬申五月十三日／願 天保十四年癸卯八月念四日／三 天保十三年壬寅四月二十四日」

2. 興昌寺藏朝鮮通信使関係詩箋貼交屏風について

興昌寺朝鮮屏風は文化度朝鮮通信使から贈られた詩箋を中心に集めたものであり、正使・副使をはじめ、製述官(文化度には従事官の職位はなし)、判官・学士などが以酌庵輪番僧等に宛てた詩文が貼られ、その他、それに附属して通信使その人の作例ではないと見られる朝鮮人の手にな

る和歌や絵画も含まれている。文化度の朝鮮通信使の行程は以下である。

自離發復路至各様日字
 二月十二日辞朝
 三月初一日到東萊府
 初三日下釜山
 二十二日乗船還下陸
 閏三月十二日発船到対馬島佐須浦
 二十九日到対馬島府中
 四月初九日江戸熟供依江戸例
 十五日江戸上使到対馬島府中
 五月初一日江戸副使到対馬島府中
 十三日江戸使臣来伝関白労問之言
 二十二日伝 国書
 二十六日江戸設宴依江戸例
 六月初一日江戸檣折依大坂城例
 十一日江戸檣折依岡崎例
 十五日受回答書
 十八日江戸熟供依江戸例
 十九日対馬島下船宴同日江戸使臣乗船發行
 二十一日別下程
 二十四日上船宴權停
 二十五日乗船
 二十七日発船
 七月初二日還泊釜山浦
 初六日還次東萊府

十一日復路兩使同到密陽分路

二十五日兩使興仁門外止宿

二十六日復命

柳相弼著『東槎錄』より

とあり、朝鮮通信使一行は一八一一年三月二十九日から六月二十四日の間、対馬府中に滞在している。三百三十六名が来日しており、対馬では府中を拠点に以厩庵などで輪番僧や日本側接待役との交流の時間を過ごした。以下に興昌寺朝鮮屏風の資料翻刻と解題を記す。

(1) 翻刻

興昌寺藏朝鮮通信使関係詩箋貼り交ぜ屏風の概要は以下である。

文化度朝鮮通信使（六作の合作含め四十八作）

文化度朝鮮通信使以外の朝鮮人（四）

日本側接待者（三）

未詳のもの（三）

合計詩箋五七枚（詩文五八作、絵画三枚）となっている。

（凡例）

一、【No】の数字は調査の際に筆者が付した番号である。

一、【1】から【30】が一隻、【31】から【57】が一隻であり、屏風は一隻ずつの全図を載せ、個別の画像は絵画を除き割愛した。

一、漢字は原則的に表現に従って旧字を使用したところもある。

一、□は不詳、※は筆者による註。

一、印章は囲い文字として示した。

一、改行は本文に従い、再現した。

■興昌寺蔵朝鮮通信使関係詩箋貼交屏風の概要		
	姓名（職位）字、号、年齢※不詳のものは省略	【No.】（数）○は絵画の賛
正使	金履喬（通政大夫・吏曹参議・知製教）字公世・号竹里 四十八歳	50 (1)
副使	李勉求（通訓大夫・弘文館典翰・知製教）字子余・号南霞 五十五歳	4.30 (2)
一堂上	玄義洵（知中枢府事）字敬夫・号坦坦軒 四十七歳 …玄玉泉か	27.43.56 (3)
二堂上	玄炆（大護軍）字陽元・号一遲 五十五歳	23.44 (2)
三堂上	崔昔（同知中枢府事）字明遠・号菊斎 四十四歳	—
製述官	李顥相（奉常寺僉正）字相之・号太華 四十二歳	1.2.9.16.24.42.55.57 (8)
正使書記	金善臣（幼学）字季良・号清山 三十七歳	3.11.22.34.37.45.53 (7)
副使書記	李明五（通徳郎）字士緯・号泊翁 六十二歳	7.10.57 (3)
上判事	卞文圭（前判官）字玉汝・号梅軒 四十歳	—
	崔仁民（前主簿）字章叔・号聴碧 四十三歳	—
漢学上判事	李儀龍（前正）字雲卿・号滄海 六十五歳	52 (1)
次上判事	金祖慶（上房乾粮官）字子裕・号晩翁 三十歳	17.33 (2)
	秦東益（前判官）字直哉・号清翁 三十歳	12.25. ㉔ .41.47. ㉔ (6)
押物判事	趙行倫（副司猛）字明五・号逸庵 三十七歳	—
	洪得俊（前判官）字仲緯・号経園 三十七歳	—
医員	金鎮周（副司勇）字汝安・号活玄斎 四十五歳	—
	朴景郁（副司猛）字聖拝・号従五所 四十四歳	—
写字官	皮宗鼎（上護軍）字子童・号東岡 四十九歳	—
画員	李義養（副司果）字爾信・号信園 四十四歳	—
正使伴倘	李文哲（太学上舎生）字君善・号菊隠	5.8.11.18.28.31.32.38.39. 40.49.54 (12)
正使軍官	李勉玄（尚衣院主簿）字季淵・号蒼崖	20 (1)
副使軍官	李運植（前内乗）字士廣・号笑圃	21 (1)
その他、朝鮮の人物	朴徳源（訳官）字聲窩・号恵源	14.19.29.46 (和歌 4)
	卞持漢（釜山武任職兼絵師）号槐園	26.48 (絵画 2)
日本側接待者	草場韓（幕府儒官古賀精里に同行）号珮川、棣芳ほか 二十五歳	13 (絵画 1)
	石川剛（侍読）小倉藩士	35-36.51 (2)
不明のもの		6.15. (2)

※朝鮮通信使については金履喬『辛未通信日録』、柳相弼『東槎録』を参照



【1】縦27・8 横14・1 (cm 以下省略)
筆者：李顕相より願海守航へ

奉別

一葦

誰為亭々即□華烟海

山深霞辺高賢宝載

松竹通三□応□□

青架□椽林下已叩

蘭氣馥雨中堪愛□

痕鮮ケ□已矣勝即

□是抱新□写□箋

太華山人相之

※一葦：願海守航、東福寺二三七世。

【2】縦31・0 横47・2

筆者：李顕相より以酈庵長老へ

奉次

酈庵長老

紛郁流霞満赤城

冷然風露腋邊生

名区借問誰為主

自是山人管大瀛

通信製述太華

山人醉稿（白文方印）李顯相印

※製述太華…李顯相（製述官）

※蓬左文庫『朝鮮人詩賦』8p所載

※「城」「生」「瀛」韻はNo.20・53

【3】縦36・2 横47・9

筆者：金善臣

朝鮮人（白文方印）金善臣印

茶烹蟹

蜨之不

律險磨

側理虚

下写烏

絲水楷

※金善臣…正使書記、号清山

【4】縦290 横24・9

筆者：李勉求より以酊庵長老へ

以酊庵長老

薬果拾立

胡桃壹帊

栢子一帊

黄栗一帊

薏苡式斤

五月 日通信副使

※薬菓…小麦を練った中に蜜を入れて油であげた朝鮮の伝統菓子。

※薏苡…ヨクイ。はとむぎ。

※通信副使…李明五（通徳郎）字士緯・号泊翁。

【5】縦30・0 横32・5

筆者：正使伴尙 李文哲より願海守航へ

和

一葦上人韻

詩韻瓢然獨不群相

思幾日更逢 君一区

烟月清虚界從此源

々会以文

菊隱稿（白文方印）菊隱

※菊隱…李文哲（上房伴尙進士…正使の付き人）

※蓬左文庫『朝鮮人詩賦』31p

※「群」「君」「文」韻はNo.7・16・52

【6】縦42・2 横27・5

印文未読のため、作者不詳

(白文橢円印)



知足式

瓢樂

(白文方印)



(白文方印)



【7】縦30・0 横26・8

筆者：副使書記 李明五より願海守航へ

奉和

一葦上人

瞎驢山色迥無群前度

莒蹊又見君海勢天風都

領畧文室清香閱奇文

泊翁(白文橢円印)



※瞎驢：本来は目の見えない驢馬の意味。禪語に多用される。瞎驢山は以酹庵の山号。

※蓬左文庫『朝鮮人詩賦』31p

※「群」「君」「文」韻はNo. 5・16・52

【8】縦23・8 横52・0

筆者：正使伴倚 李文哲より願海守航ほかへ

日前 下托諸書画軸已為

入照否霖雨支離伏惟

法礼神護萬里仰□区々僕有

老親在堂久未承安候私自問隣

奈何下□瓊章留新還旧

領納如何僕有私藁一卷及今

番与 貴庵諸賢酬唱之詩欲

録呈

尊師還 京師之後即為開刊後日

信使一本付送於僕未知

如何一葦負暄亦僕之会心友也

茲並所煩耳出入不自由已未得

往晤悵昂之々不備礼

辛未五月初七日 李文哲拜

※蓬左文庫『朝鮮人詩賦』17p

【9】縦31・8 横127・5

筆者：製述官 李頭相より願海守航へ

(白文長方印)

和贈

一葦禪師

清磬依々

夕照天座

間談咲亦

猶賢落花

啼鳥渾無

諸不辨吾

身是後前

歲辛未

四月七日

朝鮮國太華

山寄虛子

太常小正

書

(白文方印) 太華山人

※蓬左文庫『朝鮮人詩賦』27p

【10】縦32・0 横54・1

筆者：副使書記 李明五より樵隱和尚へ

両使相公和 樵隱和尚

韻命次其韻困呈

驢山葦榻下

鯨波闊□早乘湘彩

舫褰帷拳手邀心淨

先□明月照□香翻

作□□瓢星槎何□

元通路 綳 栓東南誰

招標区□□縁棗下所

瞎驢山色暮還朝

朝鮮書記泊翁 (白文橢円印) 士緯印

【11】縦18・2 横(最大) 48・5

筆者①：正使書記 金善臣

筆者②：正使伴僞 李文哲

□國緑

竹

□清起

際

之桴

即水

華

光照臨川

之

葦

朝鮮通信書記

清山書 辛未中夏

漠南氷釋

水初平

視者如牆

送我行

夕陽無限

沙頭樹

多久親朋

送別情

右來時渡漢江

朝鮮太学生菊隠（朱文長方印）



【12】縦34・5 横6・6

筆者：秦東益

（楷四印）□□

萬事不如杯在手

一年幾見月□頭

清翁

（白文方印）清翁

（朱文方印）直哉

※清翁：秦東益（前判官）字直哉・号清翁

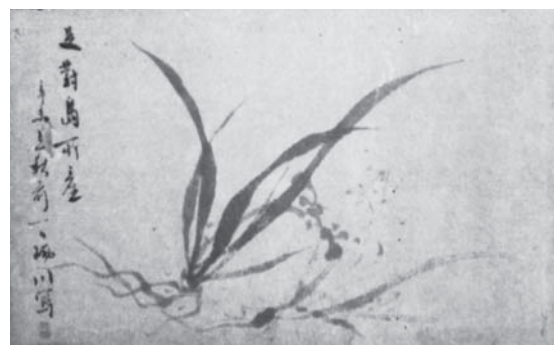
【13】縦15・0 横23・3

筆者：草場珮川 画と墨書

是對馬所産

辛未立秋前一日 珮川写（下駄印）珮川 □□

※草場珮川：佐賀藩多久領出身で、江戸で古賀精里に学び、佐賀藩藩校弘道館教授を務めた。珮川（對馬滞在時は珮川。後に珮川と改める）は号で、通称は磋助（さすけ）あるいは磋助、名は韓（さかえ）、字は棣芳（ていほう）。漢詩人として知られ、文人画にも優れた。



【14】縦34・2 横5・4

筆者：朴徳源

昨日まで目のまふいと花落葉かな

朝鮮 聾窩（朱文方印）恵源

※聾窩、恵源：朴徳源（文化度の通信使以前に對馬と釜山を行き来した訳官とみられる。）

※大意：昨日までは眼前にゆれていたが今は落葉となったのだなあ

【15】縦17・1 横24・0

筆者：落款未読のため不詳

□然変態挹清

風□治一樣又一枰

当暑不須河銅

欽先秋旦促海東行

□既□尾塵追□逐

柳石松陰涼自生

清看庭前百合

孚華開巷詠底心

情

□藩草□

(白文方印)

械□

(朱文方印)

□□

【16】縦27・9 横38・6

筆者：製述官 李顯相より願海守航へ

奉和

一葦上人

遯世日間拳庶群

海山深处如逢君

白雨一番僧戸過

也有龍神聽偈

文

太華山人(白文方印)

相之

※「群」「君」「文」韻はNo.5・7・52

【17】縦31・1 横55・9

筆者：次上判事 金祖慶より願海守航へ

奉和

一葦禪師山窓

欲聞梵呪海潮雄

更見瓊篇滿佛

宮般若湯餘提跡

宕誰知三□□無

円

辛未夏五

朝鮮晚翁稿(白文方印) 晚翁

※晚翁：金祖慶(上房乾糧官) 字子裕・号晚翁

【18】縦28・8 横40・6

筆者：正使伴尙 李文哲より願海守航へ

(白文長方印) 輿報古印

複作短律寄

一葦禪師

塔轉紅輪日樓空碧

海天百年塵却杳一

道瑞光圓偶得山房

会也知宿世緣擲詩

聲價重如玉出藍田

辛未肇夏

朝鮮國菊隱散人稿（白文方印）菊隱

※蓬左文庫『朝鮮人詩賦』4 p

【19】縦35・0 横5・7

筆者：朴德源

散華をうけて開くやさくら草

朝鮮 聲窩（朱文方印）惠源（朴德源）

※散華（チルハナ）を うけて開くや さくら草

※大意…散つていく花をうけて、さくら草が花開いたことだ

【20】縦33・1 横57・4

筆者：副使軍官 李勉玄より驢山長老へ

山靄重々満古

城平明尋寺到

飛生応知 禅

老留神錫萬

里風潮静遠瀛

蒼崖同和

驢山長老（白文方印）※印文未読

※蒼崖：正使軍官・李勉玄（尚衣院主簿）字季淵・号蒼崖

※蓬左文庫『朝鮮人詩賦』9 p

※「城」「生」「瀛」韻はNo.2・53

【21】縦33・1 横55・6

筆者：副使軍官 李運植より願海守航へ

和贈一葦

法孫

有花開落上方

天般若湯香勝

酒賢題扇未客

詞一句何論盧後與

王前

李笑囵稿

（朱文方印）黃華晚館

※李笑囵：副使軍官・李運植（前内乗）字士廣・号笑囵

※蓬左文庫『朝鮮人詩賦』26 p

【22】縦34・8 横55・1

筆者：正使書記 金善臣

（白文方印）乾坤艸亭

編

蒲

朝鮮 清山（白文方印）金善臣印

【23】縦31・1 横58・9

筆者：二堂上 玄炆より願海守航へ

和呈

一葦上人

鍾著撞来較海

碓禪扉雙扇桃

蝮宮瞎驢山色滿樽緑消更清

縁偶坐同

辛未午月

朝鮮一遲稿（朱文方印）



※一遲：二堂上・玄炆（大護軍）字陽元・号一遲 五十五歳

【24】縦25・0 横69・5

筆者：製述官 李顕相より樵隠長老へ

臨行草々書

奉

樵隠長老

幾度西庵詔

青鞋染芳草

素朶為

君鼓詩篇為

君挹閣□品

慣面□意底

茗掃 一□

□子里此前□

人老

辛未六月廿六

朝鮮婦客 太華

山人李顕相々

之稿（白文方印）南華山人

【25】縦16・5 横20・0

筆者：前判官 秦東益

（白文楮円関防印）※未読八字

古調鍾自

愛

今人多不

彈

朝鮮清翁

（白文方印）清翁（朱文方印）直哉

【26】縦14・3 横（最大）34・0

賛者：前判官 秦東益

画者：槐園



(白文方印関防印) ※未読四字

談 当 世 之 訖 耶 朝 鮮 清翁

(白文円印) 直哉 (白文方印) 清翁

(白文長方印) ※未読三字

朝鮮槐園(白文方印二顆) ※未読

※槐園：卞持漢(釜山府武庁武任職の絵師)

【27】縦36・2 横40・5

筆者：玉泉：不詳(玄玉泉は玄義洵であるか)から以酌庵長老へ

奉□酌庵

長老榻下

禎□□應出□齋

□求肥□叩今□

上浩々自忘機

是水声白岳山嶽

勢□走以酌庵前

雲遠邨淡々烟

朝鮮國玉泉居士(白文方印) ※未読

※白岳山嶽：対馬の山「白嶽」か

【28】縦28・5 横39・5

筆者：李文哲より願海守航へ

(白文長方関防印) ※□□□□師

和贈

一葦禪師寄示韻

我漸彫虎子降龍如水交情

貴篤恭他日相思千萬里
墨痕猶濕海雲濃

杖能解虎鉢藏龍幾度逢
迎禮數恭天地東南萍水調
烟霞秀氣兩眉濃

辛未仲夏雨中

朝鮮太学上舍生 菊隱稿

(白文方印) 菊隱
(白文長方印) 澹□寧靜

※蓬左文庫『朝鮮人詩賦』30 p

【29】縦19・2 横17・0

筆者：朴徳源

おもふ あふ

こと けは

なと問 空に

人の 月そ

なかる さや

らむ けき

朝鮮 聾窩 (朱文方印) 恵源 (朴徳源)

※思ふこと など問う人の 無かるらむ 仰げば空に 月ぞさやけき
※大意：思ふことをどうして問う人があるうか、仰げば空に月が清らかな光を放っているというのに

※注：『老若五十首歌合』（二二〇一年二月）雑「453」番歌

【30】縦106・5 横31・1

筆者：副使 李勉求

樹色中流見

(白文方印) 南霞



ここより別隻

【31】縦29・5 横52・0

筆者：正使伴倘 李文哲より樵隱頭へ

次呈

樵隱頭

滄海為池富士

城乾坤造化豈

無情西風落木

相思夜夢裏（魂夢）飛

來萬里程

辛未六月二十六日

青邱婦客菊隱（白文橢圓印）※未読五字

※青邱：（青丘）は朝鮮半島を指す雅称。

【32】縦30・0 横49・8

筆者：正使伴倘 李文哲より願海守航へ

和贈

一葦

水聲環寶塔

山色落巖扉

幸隧重逢約

悠然坐翠微

菊隱（白文長方印）※未読五字か

【33】縦36・0 横50・2

筆者：次上判事 金祖慶より樵隱長老へ

奉和

樵隱長老師坐下

□筍禪家氣自清眉

間立龜笑相迎夢中

難合扶桑國數句留

伝香火青

辛未夏五

朝鮮晚翁稿（白文方印）
[晚翁]

【34】縦31・1 横50・5

筆者：正使書記 金善臣より樵隱長老へ

禪節遲返□羅城

却與□冠托遠情

無那落行成永

列□天飲海是

歸程

辛未楊夏

朝鮮清山奉和

樵隱長老（白文方印）
[金善臣印]

【35】縦30・8 横44・2

筆者：未詳（【36】の連れか？石川剛か）より以酊庵へ

（白文長方印）
[學禪地靈之]

初上 以酊庵恭奉呈

樵隱尊師老大和上

万里蒼波接翠嵐海

西名勝以酊庵蜃樓

貝厥連空界碧瓦瓊

□遍蔚藍上國

高僧來卓錫殊方嘉

客比停驂不惟清眺

舒羈思路滑石頭

禪可參

【36】縦30・5 横45・0

筆者：石川剛…小倉藩士侍読

其二

海上梵臺是虎丘珍

樓寶殿駕鰲頭洪

濤捲雪空中起彩

霧□□風水浮異

容新題極勝□

真僧旧典存風流何

凶行役來茲地回望

扶桑六十州

頃有人伝示韓客四月七日以酊庵

唱和作因腰聯及之

石川剛拜□

(白文方印) 石川剛印

(朱文方印) 間□

※35・36は形状、筆致、二枚目冒頭に「其二」とあることからして連作と推定。

【37】縦17・0 横23・3

筆者：李顕相より願海守航へ

懸知一黙老人

星乏君照

君諼草底家

朝鮮太華為

一葦上人

寿母句(白文方印) 金善臣印

【38】縦29・6 横24・1

筆者：李文哲より願海守航へ

(長方関防印) ※未読三字

寿

朝鮮菊隱(白文方印) 菊隱

【39】縦30・1 横45・0

筆者：李文哲より願海守航へ

(白文長方印) □□古印和呈

一葦禪師

人性元來賦一天西方

聖教 子惟賢婦來

客館孤燈夜水月

清漂在眼前

辛未肇夏

朝鮮國菊隱散人稿(白文方印) 菊隱

※蓬左文庫『朝鮮人詩賦』4p

【40】縦30・8 横58・0

筆者：李文哲より願海守航へ

奉和

一葦禪師

東國詩人有太華

清山聲譽又同車

飲齋奇氣蒼崖

老領略名区散

綺霞

辛未夏

朝鮮國太學生菊隱

題于燕鴻室中(白文方印) 菊隱(白文方印) 李文哲印

※燕鴻室：以酌庵

※蓬左文庫『朝鮮人詩賦』10 p

【41】縦32・8 横6・2

筆者：前判官 秦東益

泛舟赤壁（白文方印）清翁（朱文方印）直哉

【42】縦17・1 横（最大）48・0

筆者：李顕相より以酓庵長老へ

問君御事

佳孤庵

性見天風

入仏龕

出乏有時

無偈語

夕陽雲水

盡東南

朝鮮國外

國学士

李顕相々之

甫奉呈

酓庵長老

蓮几下

（白文方印）李顕相印か

【43】縦29・1 横57・2

筆者：玄玉泉（は玄義洵であるか？）より願海守航へ

和贈一葦

法師

石経懸崖緑樹

天空門邂逅主

人賢君家契治

何須問法海（華は間違い）

盈々満眼前

玄玉泉

謹稿

（朱白文方印）※白文未読、朱文「酒家」

※蓬左文庫『朝鮮人詩賦』27 p

【44】縦32・0 横58・2

筆者：二堂上 玄炆より樵隱和尚へ

謹呈

樵隱和尚詞案

階満青莎松韻

清已知結夏罷

逢迎新詩翻出

金剛偈久仰

高師不世情

辛未端陽節

朝鮮一遲室陽元

(朱文方印) □□王事

※端陽節：5月5日

【45】縦18・1 横23・8

筆者：正使書記 金善臣より願海守航へ

鳧藻亀蓮

一家之慶

出而猶齋

允孝能敬

右為

一輩上人

寿母頌 朝鮮

清山(白文方印) □清山

【46】縦19・0 横17・1

筆者：朴德源

そなたそとさすか

呻(※ヨミ うなる) えたはなる

野はらのすえの

さをしかの聲

朝鮮 聾窩 (朱文方印) □惠源 (朴德源)

※そなたそと さすか呻る 枝葉なる 野原の末の さを鹿の声
※大意：そちらだと鳴いているのか、野原の端から鹿の聲がすること
だ

【47】縦36・5 横7・0

筆者：前判官 秦東益

(白文楷印) ※未読

百華無多時壯健一春能幾日清明□逢且幕推

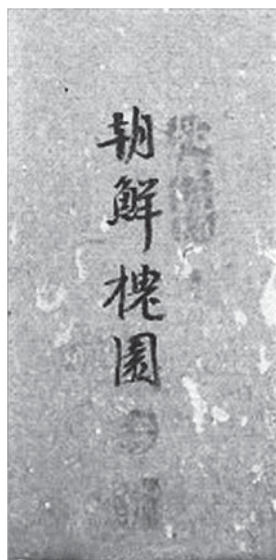
扇□聴唱場□四聲

朝鮮清翁(白文方印) □清翁(朱文方印) □直哉

【48】縦37・1 横7・0

賛者：前判官 秦東益

画者：釜山府武庁武任職の卞持漢



(白文方印) ※未読

疑是銀河

落九天

清翁 (白文円印) 直哉 (白文方印) 清翁

(白文長方印) ※未読

朝鮮槐園 (白文円印) (白文方印) ※ともに未読

※画題は李白の「望廬山瀑布」

【49】縦17・2 横21・0

筆者：正使伴尙 李文哲

蒼海為酒扶

桑折籌酌以

太斗聊介睂

寿

辛未季夏

朝鮮太学生菊隱 (白文長方印) ※未読

【50】縦115・1 横30・4

筆者：正使 金履喬

(芭蕉葉印) ※未読

生香不斷樹交華

(白文方印) 通信正使

【51】縦33・0 横47・1

筆者：小倉藩士 石川剛

(朱文長方印) ※未読

一葦禪師潛勤余贈詩篇

於韓客乃托以彎迎集

乞寄示詩泊翁禪師欣然

謹之因詩以一絶

安居猶不廢詞章遊戲

度人翰墨場豈料少林

面壁老一葦時扱代

津梁

小倉 石川剛奉呈

(白文方印) 石川剛印 (朱文方印) 問

【52】縦53・8 横48・2

筆者：漢学上判事 李儀龍

奉和

寄示韻

禽無陳語自成群

此地□宣有此君夏

日遲々心界静竹窓

梧几問経文

李滄海稿

(朱文描き印) 滄海

※李滄海：漢學上判事・李儀龍（前正）字雲卿・号滄海

※蓬左文庫『朝鮮人詩賦』31p

※「群」「君」「文」韻はNo.5・7・16

【53】縦31・2 横47・0

筆者：正使書記 金善臣より驢山長老への韻

千尺亀巖一片城行尋

芳草却愁生上方咫

尺猶相阻何況神山隔

大瀛

朝鮮通信書記

金清山同和（白文方印）金善臣印

驢山長老韻

※蓬左文庫『朝鮮人詩賦』9p

※「城」「生」「瀛」韻はNo.2・20

【54】縦30・0 横44・3

筆者：正使伴倘 李文哲より願海守航へ

（朱文長方印）※未読

贈別

一輩禪師

地接扶桑樓天垂柝

木躰貝樓珠箔捲軸

錦帟懸翠鳥樓林抄

碧桃迎海邊三山風引去

何日共登仙

辛未軸夏

菊隱燈下醉題（白文方印）※未読

【55】縦18・1 横（最大）47・0

筆者：製述官 李顕相

立亀峯箭

以酌庵

菴開勝賞

以奇峯

長老焼香

無個事

破苔来客

生軸

朝鮮通信

製術官

李顕相稿

（白文方印）※未読

【56】縦35・0 横47・0

筆者：玄玉泉であるか？

崢嶸白塔海門

天諸子衣冠不

乏賢客到尋真

披古蹟四時□

景小菴前

歲辛未抄夏

朝鮮人玉泉居士

(白文朱文方印) 朱文「酒家」白文未読

※蓬左文庫『朝鮮人詩賦』3p

【57】縦31・0 横148・5

筆者：製述官 李顕相（李明五の代筆）より一輩上人へ

和贈

一輩上人

山中

小雨橘

花天為

訪西菴

老宿賢

一輩

粲然呈

一笑清詩

如偈煮

茶前

朝鮮國

書記泊

翁李士緯

使太華李

相之書（白文方印）泊翁

※蓬左文庫『朝鮮人詩賦』27p

(2) 解題

室町時代から続いていた朝鮮通信使の来日は、文禄・慶長の役（壬辰倭乱）を境に途絶えていた。しばらくの沈黙を破り、一六〇七年に回答兼刷還使として江戸時代はじめて来日してから、第四回目以降は將軍の代替わりの際にその祝賀の命を帯びたものとなる。徳川の新將軍襲職祝賀には朝鮮国王の使者・通信使が国王の国書と礼品を携えてソウルから発し、釜山から対馬、瀬戸内海から大坂、京都を経て江戸へ。十二度にわたり使者が往還したことは周知の事実であり、それに際して対馬藩宗氏がその主導的役割を担い、来日に先立って水面下での交渉、調整を果たした。このように異国の使者通信使来日の窓口であった対馬をはじめ、朝鮮通信使が歩いた街道やその縁地には足跡を示す詩書画や扁額、接待の様子を示す絵図、接待記録などが見出される。

興昌寺朝鮮屏風の詩箋判読の過程で、その内容が徳川家の書物を管理する名古屋市蓬左文庫所蔵『朝鮮人詩賦』および『和韓唱集録』に文化八年（一八一二）の夏に対馬において詠まれた詩文のうち願海守航宛の十六枚十八篇（No. 2・5・7・8・9・18・20・21・28・39・40・43・52・53・56・57）が載録されている点が確認でき、興昌寺朝鮮屏風における詩箋がその時に詠まれ、記された原本であることが判明した。また、朝鮮通信

使側が残した史料を探ると、副使・李勉求が金善臣（号・清山）に命じ、対馬での詩文唱酬や対馬の風俗や産物について綴り、後代が筆写した『清山島游録』（韓国・ソウル中央図書館⁵）にも一葦こと願海守航から通信使一行へ贈った詩文が所載されており、（No. 5・7・16・52）韻が合致する。

以酹庵和一葦上人

浮雲為馭玉為羣

滄海駟珠幸得君

前到清山今複到

相逢恰合好說奇文

『清山島游録』ソウル中央図書館蔵より

ほかソウル近郊を流れる漢江を渡る際に詠まれた扇面（No. 11）も屏風に貼られており、通信使一行が対馬を離れ、帰国した後にも送別に関しての句が認められ、何らかの手段を使って帰国の後に日本へ伝えられ、一葦上人の元へ届いた様子が知れる。

そのほか、文化度通信使の一員ではない、訳官朴徳源が記した和歌が四枚（No. 14・19・29・46）があり、現状で朴徳源新出史料と位置付けられよう。朴徳源に関して言うと、従来朝鮮通信使随員とみなされつつも、それが一七四八年であろうと確たる証拠は、不詳のままになっていた。近年郷土史研究家・岡部良一氏によつて、朴徳源は渡海訳官の随行員であらうという新説が提出され、現在ではその説が支持されるようになってきた。岡部氏は資料を整理検討され、朝鮮通信使として日本へ来日した人物であるかの疑問が呈されている。⁶ いずれにせよ和歌に巧みな日本の古典文学と古筆を習熟した朝鮮人であり、釜山の草梁倭館周辺で活躍した人物であることには違いない。

ほか、興昌寺朝鮮屏風には朝鮮絵画二枚と日本の近世絵画一枚が納められているが、後に改めて述べる。

興昌寺朝鮮屏風の詩箋、料紙について考察すると、目視では漉き目や紙の繊維の在り方からは扇面を除いては朝鮮紙特有の剛直かつ柔和な様子はなく、薄く繊細な日本の紙を用いたように思われた。貼られた詩箋の形は長方形が多く、ほかに扇面四枚（No. 11・26・42・55）、短冊六枚（No. 12・14・19・41・47・48）が見られる。

3. 朝鮮槐園が描いた山水図について

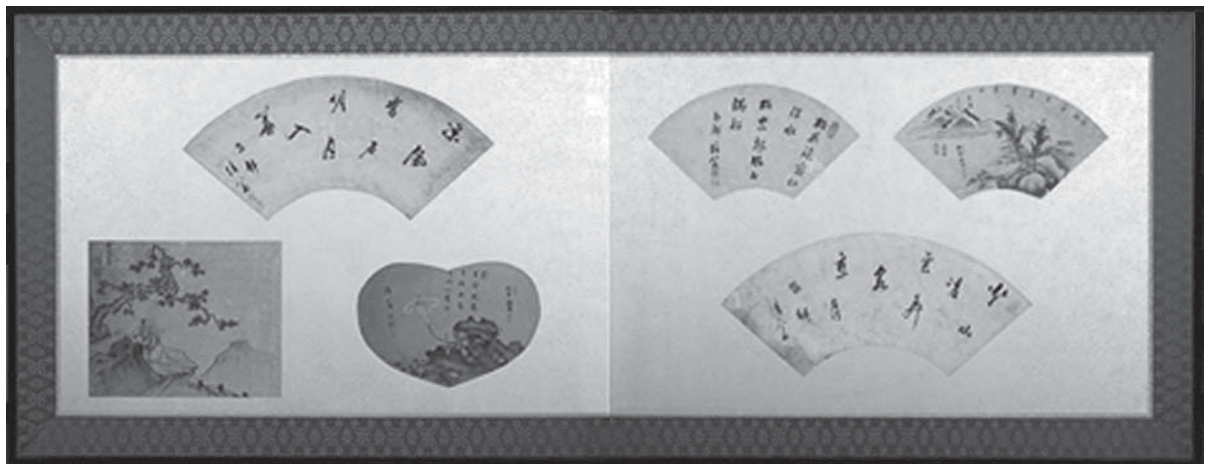
興昌寺朝鮮屏風の朝鮮絵画は釜山の地域で武任職にありながら絵師としても活躍した絵師槐園が描いた山水画二点（No. 26・48）と、草場佩川の墨画一点（No. 13）が全体で五十七枚の中で少数にはなるが存在し、いずれも扇面、短冊などと小品で朝鮮時代、江戸時代（十九世紀）の作品である。ここでは興昌寺に伝来する槐園の号を持つ山水図と周辺の作例を併せ見て、その画法と伝来の様子について考察を試みる。

まず槐園の号での作例は興昌寺朝鮮屏風の二点ほかにも京都五山、以酹庵へ碩学僧を輩出した寺院、相国寺慈照院に十一一点伝来し、博物館としては、釜山博物館に四点、国立晋州博物館金龍斗コレクションに一点、翰林大学校博物館李元植コレクションに一点、日本における朝鮮絵画の一大コレクションを築いた幽玄斎コレクションに七点散見される。韓国に伝来する作品は金龍斗や李元植などの在日朝鮮人や日本のコレクターらが収集した経歴を持つ、一旦日本へ伝来した後に再び海を渡ったと認められるものである。これらの槐園作例は南宗画風山水画、花鳥図、花枝図、虎図、豹図、鷹図からなり、日本人向けの交易用の作品と思しく、慶尚南道東萊府武任職を兼ねて絵師としても活動していた卞持漢の作で

あり、十八から十九世紀に同じ釜山で活動が認められる卞璞、卞崑、卞琢、卞持淳といった卞氏一族と武任職兼画師としての関わりが検討できるものである。これらについては釜山の在地研究者が論考をまとめており、槐園の号を持つ作者はこれまでは尹持漢^⑦であったが、卞持漢である^⑧と結論付けている。

ところで、武任職を兼ねた釜山地域の絵師についてであるが、それが如何なるものであるか？朝鮮時代後期（江戸時代のころ）には慶尚南道東萊府は国防や外交、交易の拠点として栄え、壬辰倭乱（文禄・慶長の役）以後、日本使節の上京が禁止されるなかで対日外交においては重要な拠点としての役割を担った。東萊府には倭館がその境域に設置され、厳しい取り締まりが敷かれる中、境界の内外で外交がすすめられた。武任職については草梁倭館の存在と浅からぬ縁があるようで、武任職の職域のなかには絵師軍官という任務、つまり地図制作が含まれていたという。槐園・卞持漢については文化度の朝鮮通信使とはまた別のルートで彼の作例が日本へ伝来した可能性も含めて検討する必要がある、中央画壇とは異なる特異な絵師であるほか、港町釜山、釜山には日本人居留地倭館が存在した国際色豊かな日本と近接した場所柄であることも充分考慮する必要がある^⑨。

興昌寺朝鮮屏風に類似する作例として、京都相国寺慈照院には朝鮮通信使関係の屏風が風炉先屏風一隻と詩箋貼交屏風一雙が存在する。それらは元来慈照院の方丈障壁に貼り交ぜられたものであったといい、現住職の手によって屏風に改められた。慈照院が所蔵する槐園画は十一枚^①
②は風炉先屏風一隻に、③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪は屏風一雙に貼交）あり、画題は山水図七点、百合図、柳図、花枝図など花卉図は四点である。いずれも小品であり、料紙は日本製であろうか。形は扇面、短冊、团扇形、横長四角の紙幅からなる。特に短冊は朝鮮での使用例はなく、完全に日本人



風炉先屏風 一隻 慈照院

朝鮮通信使詩文貼交屏風一双 慈照院



の好みか、要求を反映させたものである。

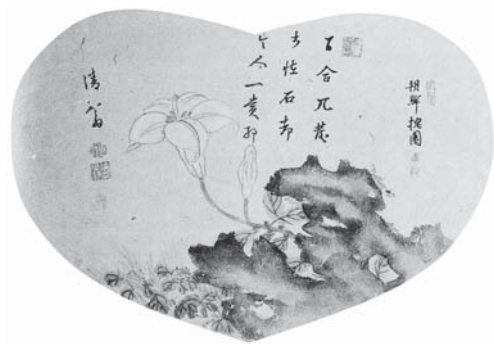
槐園が描いた山水図について画法の考察を行うと、手慣れた早い筆運びで、乾いた筆を用いた枯淡な仕上りであるが、花卉図は淡彩で描き、これらは水分をたっぷり含ませた湿潤な筆を用いて、花卉の生命感を表現したものである。興昌寺の山水図【No.26・48】二点と慈照院の山水図七点（①④⑤⑥⑧⑩⑪）の表現的特徴をみると、主題により、多少の異なりを見せるがおおむね前景に画面に対して左右のいずれかに寄せた土坡に数本大きく表した樹木を配し、亭を描く。遠景に小さく山を置き、中景に水辺や山村、船を浮かべる手法を執り、小さな画面においても遠近を重視した伝統的な山水図構図を崩していない。ここには朝鮮時代を経て様々な筆法が試みられ、あらゆる要素が結実した様子が見て取れよう。

その淵源を探ると、中国元時代四大家倪瓚（一三〇一～一三七四）が得意とした平遠構図「一河兩岸」が展開しており、乾筆による皴擦の法を用い、少ない筆致で余白も多く残した文士の気品を備えた作風である。しかし詩書画ともに最高の名手と賛美された倪瓚の手法そのものを写した臨模ではなく、気高い精神性から雅趣に重きを置き、詩的な趣にシフトさせた態度が隠されているような気配がある。また、極度に丸みを帯びた山頂をとらえた表現やT字形の松樹表現は朝鮮時代後期に活躍した鄭叡（一六七六～一七五九）の山水画風を取り入れた様子が見える。鄭叡の画風はそのあとの彼の画風に影響を受けた沈師正（一七〇七～一七六九）、姜世晃（一七一三～一七九一）、金有聲（一七二五～？）明暦度朝鮮通信使随行画員、金應煥（一七四二～一七八九）らの山水画風にもこの南宗画風の傾向は存在する。釜山東萊府武任職兼絵師卞持漢が描いた山水図は朝鮮時代後期から末期（十九世紀）における中国の南宗画風の解釈を先行する鄭叡によった真景山水図と連綿とつながった、幾度にも古典回帰を繰り返した文人画の系譜の終着地点とみなすことができよう。今一度槐園が描

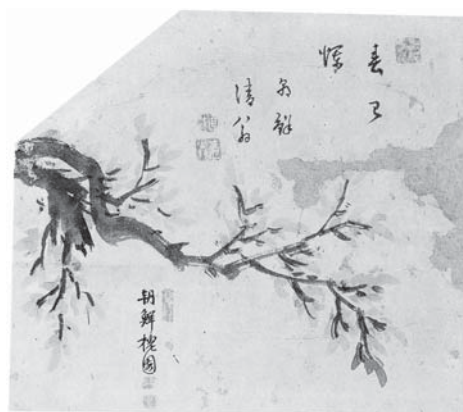
いた山水図を見直すと、伝統画風に培われた文人趣味を小さな画面に端的に表して、豊かな詩情を筆致の上でも表わした作例であることが読み取れる。武任職という立場での南宗画をどう理解し、整理するかは多くの課題を残していると思われるが、文人の余技で描かれる、多くの知識を備えた人物が技巧に走らずに描く絵画が南宗画である。そのため、ここでは「南宗画風」というくくりで一旦とらえておきたい。

慈照院蔵 槐園画①～⑪

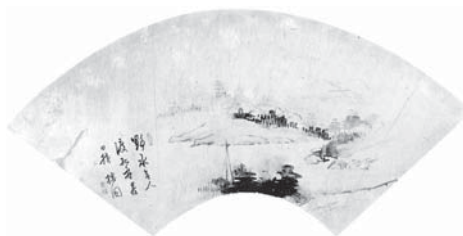
①山水図 縦18・4、横33・6
②百合図 縦19・4、横28・6



③花枝図 縦18・0
横20・0



④山水図 縦25・2、
横53・1



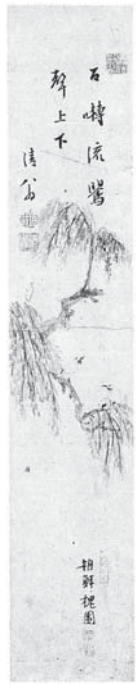
⑤山水図 縦62・0、横27・5



⑥山水図 縦63・0、横27・3



⑦楊柳図 縦37・2、横7・0



⑧山水図 縦36・9、横6・8

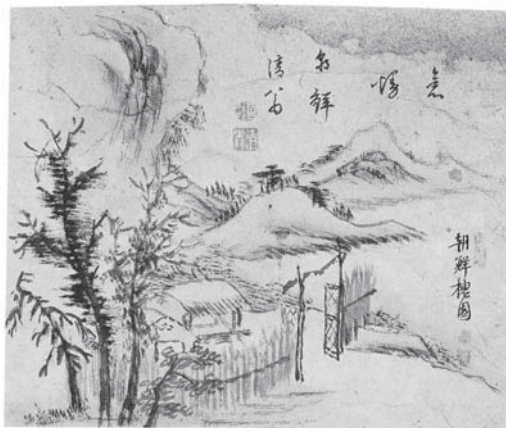
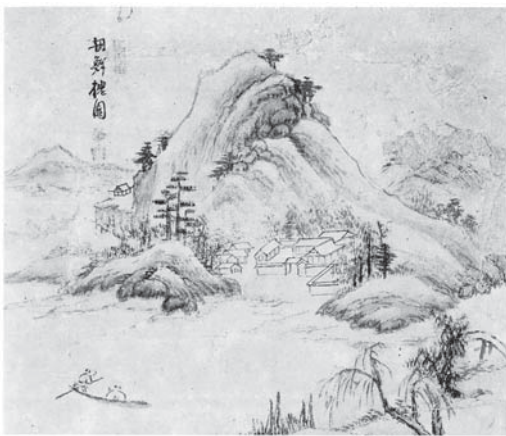


⑨花枝図 縦37・2、横7・0



⑩山水図 縦18・5、横22・1

⑪山水図 縦18・6、横22・2



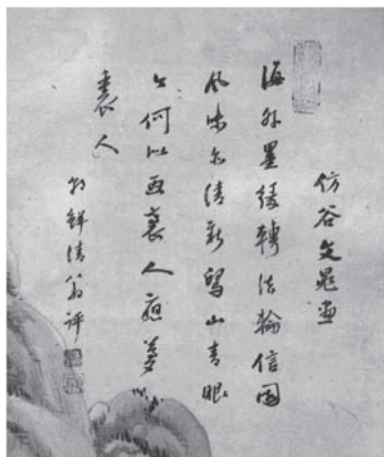
朝鮮時代、文武両班による政治が敷かれ、士大夫は科挙試験に及第し、熾烈極まる考試を突破するためには、知識を備えることはもちろんのこと、本質的な文化的素養も求められた。朝鮮通信使の随行員のなかには文人のほかに軍官の職位で来日した武人も当然含まれていた。朝鮮通信使という特殊な任務であるため武人である彼らにも教養豊かな人材が選ばれたのかもしれない。興昌寺朝鮮屏風のなかにもまさしく正使軍官李勉玄と副使軍官李運植が詠んだ詩文(No.20・21)が含まれており、武任の職である。しかし、槐園・卞持漢が武任職兼画人という職の領域を広範囲に捉えていたことにも実例があるように、朝鮮における文人嗜好へのこだわりの深さと浸透の度合いについてはそうたやすく理解できるほどのものではないだろう。朝鮮時代は中国の古典にその源を求める明時代の文人趣味が強く反映した社会が形成されつつも朝鮮という土地での伝統に浸透するという複雑な構成である。中国の先の時代に端を発する山水図一つを取って例を挙げると、朝鮮という土地と風俗において十分に咀嚼し、そこに情感を盛り込んできた歴史とみることができるところ。

さて、賛者について検討すると槐園が描いた画には決まって清翁の賛がある。興昌寺朝鮮屏風の朝鮮絵画二図と慈照院の槐園画には賛がない三枚の山水図を除き、全てに清翁・秦東益の賛文が寄せられている。両寺院の槐園画清翁賛の山水図作風をみると、制作時期はほぼ同時期とみなせよう。一方で慈照院朝鮮屏風における賛が寄せられていない作品の中で他の作品より若干粗放な雰囲気がある山水図(⑤⑥)は同じ時期のものであるか判然としない。通信使の帶來品であるか疑問を呈するが、推測にすぎない。

清翁・秦東益が絵画に賛を寄せたほかの作例に、対馬帰国後のものがある。それは谷文晁が文化度の朝鮮通信使が帰国した翌年に送った山水

図を基にしたものである。倣谷文晁画（と言っても画風が多少異なる）とした李義養画山水図が泉屋博古館と釜山博物館（図版⑫）二館が所有している。こうした例も鑑みると、槐園の作品が朝鮮通信使来日の時点にあらかじめ用意されて持参された可能性のほか、任務の後に手配され届けられた可能性も考えられる。

⑫李義養画秦東益賛倣谷文晁山水図 釜山博物館 縦131・3 横54・5



朝鮮通信使における秦東益の位置を確認すると、役目は次上判事であり、上判事、漢字上判事、次上判事、押物判事とあるなかで、三十歳に

して来島した最年少の部類である。秦東益は年少ながら中国唐宋代の詩文を習熟し、自身においても漢詩文を作っている。またそれを表現する墨戯の才を備えた上、絵画賞玩の眼を持っていたと見なせる。彼と絵画作例との関わりはその他の通信使一行のなかで秀でたものがある。対馬で鵲や蘭、竹の絵を描いて一行をもてなした草場佩川に「珮川天下奇才」という賛辞を別の日（六月二十六日）に贈っているのもこの秦東益である。^⑩

興昌寺朝鮮屏風における一枚の日本人の絵、草場佩川作の墨画は蘭図と思しいが、描かれている内容は不明と言わざるを得ない。^⑪「是對馬所産／辛未立秋前一日珮川写」立秋の一日前であるとするが、一八一一年の立秋は六月二十日にあたるようであり、本作が六月十九日に対馬で描いたものと推定できる。草場佩川が対馬に来島したのは五月二日であり、船で離船するのは七月四日である。

さて、興昌寺と慈照院の朝鮮屏風が京都へやってきたのは対馬との往来のなかでと考えられるが、慈照院の対馬以酊庵輪番碩学僧盈冲周整は以酊庵第七七世であり、七八世が願海守航である。

第七七世	盈冲周整	相国寺慈照院	文政八年四月
第七八世	願海守航	東福寺大機院	文政十年四月
・・・中略・・・			
(再 住)	盈冲周整	相国寺慈照院	天保六年四月
(再 住)	願海守航	東福寺大機院	天保八年四月

伊藤東慎『黄龍遺韻』より

慈照院からの以酊庵輪番は天保六年（一八三六）から二か年の盈冲周整の回が最終であり、二度前後して輪番している。輪番の際の接点は一度ならずあり、両者は何らかの関りを共有しているものと思われる。

その他、槐園の作品は流通していたようで、田原市博物館が所有する渡辺如山（一八一六～一八三七）の画冊『客坐縮臨』（一八三二年）には「朝鮮槐園」の山水図が縮図として収まっている。一見して、興昌寺朝鮮屏風と慈照院朝鮮屏風で見た扇面山水図に類した絵画の写しであり、墨画のほかに淡彩で淡く青、緑、赤色が刷かれた様子が判る。落款部分「朝鮮槐園」のほかに左肩に「香雪方」と記されている。「香雪方」とは当時の所蔵者と思しい書画家山内香雪（二七九八～一八六〇）を意味するものと推定でき、渡辺如山は華山の実弟で、二十二歳で夭折した南画家である。本縮冊から彼の眼下に朝鮮槐園、卞持漢の山水図が映ったという事象には興味を覚える。

⑬ 渡辺如山『客坐縮臨』 田原市博物館蔵



4. 対馬以酊庵での願海守航

さて、再び願海守航の足取りについて対馬での様子を検討する。彼が以酊庵第七八世として文化、文政、天保期に三度赴任しているということは先に確認した。しかし、興昌寺朝鮮屏風に關して言うならば、一輩上人つまり願海守航へ宛てた文化度朝鮮通信使が記した詩箋が存在し、彼が一八一一年の輪番の以前に文化度朝鮮通信使に直接面会し詩文唱和を行っていた様子がうかがえる。

ところで朝鮮通信使から受贈した詩箋で為書があるものには、一輩上人、以酊庵長老、樵隱長老、驢山長老といった類である。三十枚の詩箋に為書があり、最多は一輩で十八枚、次に樵隱は六枚、以酊庵長老は四枚、驢山長老は二枚である。一輩は一輩禪師や一輩上人、法孫と合わせられているが、いずれにも「長老」との組み合わせはなく、樵隱にばかりが長老、頭という組み合わせになっている。朝鮮通信使が対馬に来島した折には、以酊庵への輪番は龍潭周禎（天龍寺）と月耕玄宣（東福寺）の二者である。朝鮮通信使が来日しない間の時期にも対馬以酊庵では京都五山より選出された碩学僧がおおむね一から三年の任期を以って柳川一件以降、徳川家光の決定によって、京都と対馬を行き来し、外交に關わる書契の起草や対馬島主宗氏の私的貿易や国書の書き替えが行われないうようにその動きを監視していた。文化度朝鮮通信使対馬聘礼の際に輪番で赴任していた天龍寺の龍潭周禎はこの時、釜山の倭館へ出張^⑬。月耕玄宣は文化八年二月二十七日、以酊庵で日韓書契を司り、翌年文化九年（一八一二）五月十五日に以酊庵で寂した。その翌年二月二日には願海守航が以酊庵へ輪番として赴任。両者は以酊庵へ続いて赴任していることになる。月耕玄宣が対馬でどのように過ごし、その後以酊庵在職中に死に至ったのかは定かではないが、東福寺塔頭大機院墓地内にある三住持

一葦 …十八枚	樵隱 …六枚	以酌庵長老 …四枚	驢山長老 …二枚
1. 奉別一葦 5. 和一葦上人韻 7. 奉和一葦上人 9. 和贈一葦禪師 16. 奉和一葦上人 17. 奉和一葦禪師 18. 複作短律寄一葦禪師 21. 和贈一葦法孫 23. 和呈一葦上人 28. 和贈一葦禪師 32. 和贈一葦 37. 為一葦上人 39. 和呈一葦上人 40. 奉和一葦禪師 43. 和贈一葦法師 45. 為一葦上人 54. 贈別一葦禪師 57. 和贈一葦上人	10. 両使相公和樵隱和尚 24. 樵隱長老 31. 次呈樵隱頭 33. 奉和樵隱長老 34. 奉和樵隱長老 44. 謹呈樵隱和尚	2. 酌庵長老 4. 以酌庵長老 27. 奉酌庵□長老 42. 奉呈酌庵長老	20. 同和驢山長老 53. 驢山長老韻
尊名：上人、禪師、法孫、法師	尊名：和尚、長老、頭	尊名：長老	尊名：長老

合葬墓には月耕大和尚の銘が右にあり、側面の没年月日も「月 文化九年五月壬申十五日」とあり、『東福寺誌』月耕玄宣の記事に符合する。これによって月耕玄宣と願海守航は共に東福寺山内塔頭である大機院にあり、またおなじ墓に眠るという親密さがうかがえる。

月耕玄宣についての記事を探ると、『清山島游録』には「次以酌庵月耕宜長老見寄韻」^④『津島日記』には「東福寺宜長老名玄宣、号瞎驢山僧、又樵隱、法臈黄衣」^⑤とあり、樵隱は月耕玄宣の号として紹介されている。このような様子から樵隱の号は月耕玄宣のものと見なすことができ、そのほかの以酌庵長老、驢山長老という呼称も月耕玄宣ではないかと判断できる。また、東福寺が有する月耕玄宣『本邦朝鮮往復書』九十六玄宣記を紐解くと、「小徒願海守航替記」とあり、願海が月耕に替わり、筆耕している。ほかに『馬島唱和』「瞎驢山僧玄宣字月耕号樵隱 僧守航願海号一葦」という記載からも師の月耕玄宣に連なつて対馬以酌庵で師の助けとして活動した様子が判明する。

まとめ

本稿では興昌寺朝鮮屏風の資料紹介を兼ね、文化度の朝鮮通信使および願海守航が歩いた道のりを検討した。興昌寺朝鮮屏風は対馬における文化度の朝鮮通信使接待を中心に、それ以前からの水面下での関わりの中で手に入れたと思われる朴徳源の和歌、そして、対馬から帰国した後にも送別の詩句を寄せたものも含まれていた。しかし、その多くは対馬での交流の際に出来上がった詩文であり、これらの詩文は一葦上人すなわち願海守航に宛てた現場で詠まれたものであるといえる。その他の文献との突合せによって、願海守航が自身の輪番より以前に文化度の朝鮮通信使を接待する東福寺月耕玄宣の徒弟として対馬へ連なっていたこと

が読み取れたからである。また度重なる対馬輪番の任を終えたころ、京都東福寺を拠点にし、郷里の先祖の菩提寺で東福寺派でもある興昌寺へと向かうようになったのであろう。その際に朝鮮通信使が母の為に詠んだ詩箋を貼り付けた屏風を寄付し、母への供養とし、この地で示寂したのである。対馬以酹庵での朝鮮通信使との交わりは京都東福寺から香川観音寺市興昌寺に波及し、五山からの対馬出向体験から多少なりの国際性が語られ、朝鮮の文人との交わりの様子が伝えられたと考えられる。現場で顔を合わせ、時には酒を酌み交わした交流によって実を結んだ詩、書、画は国や地域の枠を越えて、しずかに文人たちの世界観を伝えていたのである。

(付記) 本稿を記すにあたり、興昌寺 東福寺 大機院 慈照院

釜山博物館 田原市博物館 名古屋蓬左文庫 上杉大航 吉良文男

金崎敬子 竹本宗豊 永井慶洲 岡根方春 久山隆昭 鈴木利昌

福井尚寿 郷司泰仁 西谷功 田代裕一朗(敬称略)をはじめ、関係各位

に多大なご協力とご理解を賜った。記して謝意を表したい。

注

- ① 興昌禪寺『興昌寺誌』二〇一四年三月、pp.32～37
- ② 白石虎月『東福寺誌』思文閣出版、一九七九年六月、pp.1192～1199
- ③ 興昌禪寺『興昌寺誌』二〇一四年三月、p.37
- ④ 興昌禪寺『興昌寺誌』二〇一四年三月、p.32
- ⑤ 韓国国立中央図書館蔵『清山島游録』は朝鮮総督府図書館の所蔵品を一九四五年十月に引き継ぎ、現在に至る。
- ⑥ 岡部良一「小通事朴徳源の再検討」『朝鮮通信使地域史研究』創刊号、朝鮮通信使縁地連地方部研究会、二〇一五年十月および岡部良一「朴徳源に関する新史料考」『朝鮮通信使地域史研究』第二号、NPO朝鮮通信使

縁地連研究部会、二〇一七年十一月において、氏の郷里に存在する玄文亀書の扁額研究を発端に、既存事例の整理と検討、古文書の解析を行った。

⑦ 慈照院「朝鮮通信使文化事業会」『相国寺塔頭慈照院所藏朝鮮通信使遺物図録』二〇〇八年一月には尹持漢として紹介されている。

⑧ 李誠訓「朝鮮後期における釜山地域の絵画活動」『釜山の美術朝鮮王朝時代の絵師と絵画活動』福岡市立美術館、二〇一二年三月

李旼周「釜山の絵師たち」『釜山の美術朝鮮王朝時代の絵師と絵画活動』福岡市立美術館、二〇一二年三月、李旼周「朝鮮後期慶尚道地域画員研究」『東亜大学校학술選書三五 図書出版部』、二〇一六年十二月の中で槐園・卞持漢についての研究報告がある。

⑨ 釜山の倭館(朝鮮からは倭館、日本は和館と表記)について草場佩川は自著の『津島日記』(上)「釜山風俗」において「浦ヨリ一里ホド隔テ山ニ倚テ和館アリ、対州ヨリ兩隊長輪番ニテ、常ニ人数四五、臨時ノ着船モアレハ、七八百ニ及ヘル由、一里余方ノ地面ヲ限テ、少シハ農植ヲモナシ、鷹野ナトモアリ、釜山ノ界ニ関門有テ、互ニ出入ヲ禁ス。」と記し、港町釜山に日本人居留地倭館が大きな規模で存在していたことを伝えている。

⑩ 古賀精里『精里全書』「対禮餘藻外集附録」(静嘉堂文庫本印影本)近世儒家文集集成第十五巻、梅澤秀夫編集・解説、ぺりかん社、一九九六年二月、p.226

⑪ 文化度の朝鮮通信使側の史料『清山島游録』「博対馬島賦」「卉(草)」p.122には「群芳競發諒艸蕤蕤蘭薰酷列檐懸金釵戸植玉簪」とあるが、蕤蕤蘭とは、アマドコロを指すものと思しく、列をなして小花が簪のように垂下する植物であり、葉の形状は刀葉ではなく、描かれた花(実?)とも葉とも異なる。今後の課題とする。

⑫ 「香雪方」とは山内香雪であろうことは田原市博物館鈴木利昌館長より教示を得た。渡辺華山の師、松崎慊堂(一七七一一八四四)は文化度朝鮮通信使の接待役・侍講として対馬へ赴いており、槐園山水画伝来に関わったと推定したが、松崎慊堂の足取りや遺留品目については不詳であり、今後の検討課題としたい。

⑬ 草場佩川『津島日記』(下)「以酹庵図(中略)五山輪番ニテ以酹庵二一

ケ年住職ノ末、朝鮮エ渡リ、釜山ノ和館ニ住スル、又一年ニシテ交代アリ、時の本番ハ天龍寺碩学禪長老ナリ、号龍潭法蘊、黄衣」とある。

⑭ 筆者未詳『清山島游録』韓国・ソウル中央図書館、p.67

⑮ 草場佩川『草場佩川日記』(上) 西日本文化協会、一九七八年五月 p.95

(参考文献)

■史料

金履喬『辛未通信日録』韓国通文館刊本

柳相弼『東槎録』韓国・高麗大学校亜細亜問題研究所

筆写未詳『清山島游録』韓国・ソウル中央図書館

猪飼正毅『朝鮮人詩賦』名古屋市蓬左文庫

猪飼正毅『和韓唱酬録』名古屋市蓬左文庫※『朝鮮人詩賦』と同様(筆者調べ)

草場佩川『津島日記』(上・中・下) 佐賀大学附属図書館小城鍋島文庫

月耕玄宣、李明五ほか『馬島唱和』国立国会図書館

月耕玄宣『本邦朝鮮往復書』九十六玄宣記(小徒願海守航替記) 東福寺

■書籍

平山栞『津島紀事』津島紀事刊行会、一九一七年十二月

上村観光『禪林文藝史譚』大鎧閣、一九一九年九月

伊藤東慎『黄龍遺韻』両足院、一九五八年十一月

中村栄孝『日本と朝鮮』至文堂、一九六六年六月

中村栄孝『日鮮関係史の研究(下)』吉川弘文館、一九六九年十二月

吉沢忠『日本の南画』水墨美術大系/別巻第一 講談社、一九七六年二月

鈴木棠三『楽郊紀聞』二、平凡社、一九七七年五月

松下隆章・崔淳雨『李朝の水墨画』水墨美術大系/別巻第二 講談社、一九七七年七月

年七月

大本山天龍寺編、奈良本辰也監修『天龍寺・嵯峨野に刻まれた五山巨刹の盛衰』東洋文化社、一九七八年

白石虎月『東福寺誌』思文閣出版、一九七九年六月

田中健夫『対外関係と文化交流』思文閣出版、一九八二年十一月

中田勇次郎『文人画論集』中央公論社、一九八二年八月

吉沢忠・河野元昭『日本屏風絵集成第三卷山水南画山水』講談社、一九八二年十一月

広渡正利『博多承天寺史補遺』文献出版、一九九〇年五月

辛基秀・仲尾宏編『大系朝鮮通信使―辛未・文化度―』一九九三年十一月

古賀精里『精里全書』「対禮餘藻外集附録」(静嘉堂文库本影印本) 近世儒家文集集成第十五卷、梅澤秀夫編集・解説、ぺりかん社、一九九六年二月

田中健夫『前近代の国際交流と外交文書』吉川弘文館、一九九六年十月

李元植『朝鮮通信使の研究』思文閣出版、一九九七年八月

鈴木瑞枝『松崎謙堂その生涯と彼をめぐる人々』研文出版、二〇〇二年四月

高橋博巳『佐賀偉人伝⑪草場佩川』佐賀県立博物館・美術館、二〇一三年十二月

興昌禪寺『興昌寺誌』興昌禪寺、二〇一四年三月

塚本磨充『北宋絵画史の成立』中央公論美術出版、二〇一六年四月

李眩周『朝鮮後期慶尚道地域画員研究』東亜大学校『学術選書三五』図書出版部、二〇一六年十二月

池内敏『絶海の碩学―近世日朝外交史研究―』名古屋大学出版会、二〇一七年二月

日高真吾『市民と語らう地域文化財―かんおんじ市民大学講座 朝鮮通信使と神恵院扁額』大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館日高真吾研究室、二〇一八年三月

■論文

吉沢忠『文人画・南宗画と日本南画』『南画と写生画』原色日本の美術小学館、一九六九年二月

崔炳植『南宗画之研究與其対朝鮮時代後期絵画之影響』『中国文化大学芸術研究所』(碩士論文) 一九八二年六月

田中健夫『対馬以酹庵の研究―近世対朝鮮外交機関の一考察』『東洋大学大学院紀要』二四号、東洋大学、一九八八年

秋宗康子『対馬以酹庵に赴いた相国寺派輪番僧について』『立命館文学』五二二号、立命館大学人文学会、一九九二年六月

洪善杓『朝鮮後期韓・日間画蹟の交流』『美術史研究』十一、美術史研究会、

一九九七年十二月

洪善杓「朝鮮後期通信使随行画員と日本南画」『朝鮮通信使研究』創刊号、朝鮮通信使学会、二〇〇五年十二月

洪善杓「慈照院の書画」『相国寺塔頭慈照院所藏朝鮮通信使遺物図録』慈照院・朝鮮通信使文化事業会、二〇〇八年十二月

李誠訓「朝鮮後期における釜山地域の絵画活動」『釜山の美術朝鮮王朝時代の絵師と絵画活動』福岡市立美術館、二〇一二年三月

李炫周「釜山の絵師たち」『釜山の美術朝鮮王朝時代の絵師と絵画活動』福岡市立美術館、二〇一二年三月

岡部良一「小通事朴徳源の再検討」『朝鮮通信使地域史研究』創刊号、朝鮮通信使縁地連地方部研究会、二〇一五年十月

池世梨「以酌庵輪番僧による近世朝鮮文物の伝来について…茶道具を中心に」『アジア史学論集』一〇号、京都大学大学院人間・環境学研究科、二〇一六年一月

李炫周「朝鮮通信使ユネスコ登録対象の絵画研究」『朝鮮通信使地域史研究』第二号、NPO朝鮮通信使縁地連研究部会、二〇一七年十一月

岡部良一「朴徳源に関する新史料考」『朝鮮通信使地域史研究』第二号、NPO朝鮮通信使縁地連研究部会、二〇一七年十一月

■図録

東京国立博物館『朝鮮通信使近世200年の日韓文化交流』一九八五年十月

大和文華館『李朝絵画（隣国の明澄な美の世界）』一九九六年八月

佐賀県立名護屋城博物館『誠心の交わり―文化八年の朝鮮通信使』一九九七年

十月

田原市博物館『館蔵名品選Ⅱ』二〇〇四年十月

成田山書道美術館『近代文人のいとなみ』淡交社、二〇〇六年十一月

釜山博物館『長い交わり―韓国と日本』二〇〇八年九月

栃木県立美術館ほか『朝鮮王朝の絵画と日本』二〇〇八年十月

慈照院・朝鮮通信使文化事業会『相国寺塔頭慈照院所藏朝鮮通信使遺物図録』二〇〇八年十二月

LEEUW三星美術館『朝鮮画員大展』二〇一一年十月

福岡市立美術館『釜山の美術朝鮮王朝時代の絵師と絵画活動』二〇一二年三月

高麗美術館『朝鮮通信使と京都』二〇一三年十月

長崎歴史文化博物館『対馬藩と朝鮮通信使―十二万点の宗家文書が語る歴史の真実』二〇一三年十月

釜山博物館『朝鮮時代の通信使と釜山』二〇一五年十月

名古屋市蓬左文庫・駐名古屋大韓民国総領事館・徳川美術館・中日新聞社『豊かな朝鮮王朝の文化交流の遺産』二〇一五年十月

釜山博物館『釜山博物館所蔵書画』二〇一六年六月

和歌山県立博物館『蘆雪浚刺・草堂寺と紀南の至宝』二〇一六年十月

佐賀県立博物館・美術館『没後150年草場佩川 奇才の遺産』二〇一八年十二月

（本学文学部授業担当講師）